

課題歌「月」

「一 席」

一五、 屠殺所に明日行く牛にと夜の更けに汲み来し手桶に月のゆらめく

堀 甲枝

「二 席」

一九、 人待ちて深く冷たき息吸へば月に一つの星添ひてをり

武藤 久美

三一、 大根を明日は蒔こう畑照らす月は大きな笠冠りおり

田村 文子

「選者推薦」

二〇、 三日月に己の影踏み踊る鬼女いちめん芒の安達ヶ原に

和田 操

みちのく安達ヶ原の鬼女伝説を巧みに取り込んで、ムリのない想像力と舞台設定。題詠の手本になる作品。「月と芒」、お月見歌会にふさわしい。

三四、 若き日の父の遺影を枕辺に老いゆく母聴く「月の光」を

西 春彦

ダイナミックな詠みぶり。この歌はそれとは対照的にスタティックであり、品がいい。「月の光」の曲はその象徴であろうか。

自由歌

「一 席」

一四、 水張田に映る白雲ゆつくりと畔越え隣の田に移りゆく

柴田 恭子

「二 席」

一八、 朝顔の蔓はあてなく地を這ひぬ子らの声せぬ校舎の裏に

打保 洋子

「三 席」

三〇、 雨の日は降るを嘆きて晴れの日は降らぬを嘆く義母の口癖

広瀬 亮子

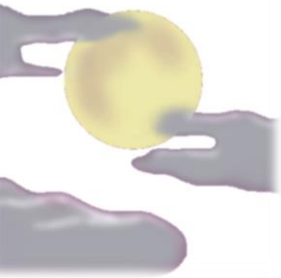
「選者推薦」

一三、 起きぬけに妻と手の平打ち合ひて何かおかしく今日が初まる
読む人の心をやさしくする歌である。特に理由はないが、朝の起きぬけに、互いの手の平を上げてハイタッチする。平和な夫婦の平安な一日が約束される。

堀内 善雄

一、 当てもなく夜をさまよう二人の子守る人なき街写し出す
行方不明になって、その後被害されていた、少年と少女が防犯カメラに写っていた。この歌はそのことを静かに詠んでいる。その反面、どこにいても写される、その不気味さも言外に伝えている。

加賀 要子



道伝えの日 お月見歌会 課題「月」

「飛驒神岡高等学校」

○入賞

缶コーヒーをコンビニ袋に透かしつつ

夜を運んでいる月を見る

今はまだ正の字に一本足りぬまま

君と話せぬ十六夜の月

空笑いしている日々とうんざりで

ふと見上げるとやっぱり三日月

「ねえ見える？」 「見える。あなたは？」 「うん、見える」

電話越しの君と満月を見る



三年 川上このか

二年 波岡梨乃

一年 荒家芽衣

二年 荒木健裕

